

令和2年度 第3回 学校運営協議会議事録

校名	府立むらの高等支援学校
校長名	吉武 進

開催日時	令和3年1月25日（月）15:00～17:00
開催場所	府立むらの高等支援学校 共用棟2階 会議室
出席者（委員）	（会長）荒木 寛巳 （副会長）大森 千枝 （委員）石神 彰人 上国料 洋子 三瀬 吉彦 弘野 優子 ※順不同
出席者（学校）	（校長）吉武 進 【事務局】（教頭）向山 和子 （事務長）清水 幸雄 宮渕 尚哉 吉田 聖名子 速水 彬裕 重松 亮 大塚 高弘 活田 侑 山口朋之 岩里 哲朗 石森 由紀子 藤川 泰生
傍聴者	希望者0名
協議資料	①本日のレジメ（次第）、②令和2年度学校教育自己診断の結果、③授業参観アンケートの集計結果、④令和2年度学校経営計画、⑤令和3年度学校経営計画
備考	後日、議事録を学校ホームページで公開 ※事前に議事録の内容を運営協議委員の皆様に確認いただき、了承を得る。

議題等（次第順）
1) 校長挨拶 2) 報告 ①「学校教育自己診断」の結果について ②授業参観アンケートの集計結果 ③令和2年度学校経営計画について ④令和3年度学校経営計画について（案） 3) 協議 4) 校長挨拶 5) 諸連絡（事務局より）
協議内容・承認事項等（意見の概要）
【承認事項等】 1. 「学校教育自己診断」の結果について確認、協議し、承認した。 2. 授業参観アンケートの集計結果について確認し、意見をいただいた。 3. 令和2年度学校経営計画について確認し、意見をいただいた。 4. 令和3年度学校経営計画について確認、協議し、承認した。 【意見の概要】 ・授業参観の保護者参加数（8名）は適正なのか？ →回答者数と参加者数は同じではない。また、感染症予防の観点から遠慮された保護者も多かった。 ・授業でのタブレット端末の活用について、①操作に付いていけない生徒への支援は？ ②理解が深い が故に起こりうるトラブルなどはないか？ →①については一定人数を認識している。各授業での積極的な活用を通して理解が広まっている。② については、タブレット端末は生徒の個人保管だが、把握できている限りでは大きな問題は認識し ていない。 ・学校現場におけるスマホ等の扱いについては、「使わせない指導」から「安全かつ有効に活用するた めの指導」へと切り替えるべき時期に来ている。 ・①いじめの把握について。「じゃれ合い」の度を超してしまい、尚且つそれに気づけない生徒への対応 は？ ②タブレット端末の活用推進による、新たなトラブル発生への備えは？

- ①アンケートを通して、些細なトラブルと思える事象にも早期に、丁寧に対応。さらに「重大ないじめ」と判断された事象については、本校生徒指導の内規に照らし合わせて厳重に対処している。
- ②については、グループLINEなどのトラブルが生じているが、生徒の訴えをもとに綿密な聞き取り調査を行い、必要な対処を行っている。
- ・就労定着率 100%という目標は学校現場にとっては重圧だと察する。また、「定着率 100%」＝「問題が生じない」ことは、表面化しない問題を孕んでいる可能性を否定できない。何らかの問題が表面化し、その対処を通して本人も周囲も成長できる。問題が生じることは、ある意味必要なことと言えるのではないか？
 - 進路指導で卒業後のアフターフォローを丁寧に進め、必要に応じて適切なタイミングで『就・』へつないでいけるように支援を行っている。今年度の進路業務はコロナ感染症が大きく影響している。実習の設定に係る様々な制約も生じた。オンラインでのリモート面接も1件予定されている。
 - ・就労定着に向けた職場訪問には、担当の先生方とぜひ一緒に伺いたいと考えている。
 - ・地域住民として、天の川カフェが再開することを期待している。コロナ関連の制約が解消された暁には、地元の広報を通して活動への理解啓発に協力したい。
 - 「楽器指導支援プログラム」には、知り合いのプロ演奏者を推薦することもできるのか？
 - 「楽器～」は特定の団体が主催するものなので、外部の奏者の参加は想定していない。他の機会において場を設定できるようならご協力頂きたい。
 - ・保護者の立場としては、アンケートにおいて「相談できる先生がいる」との回答が多数あったことを心強く感じている。相談内容やそれに対する指導・支援の実際を知りたい。
 - いじめ対策委員会では、「いじめに関するアンケート」および「安全で安心な学校生活を過ごすために」（いずれも全員配付のアンケート 個別に封入の上回収）を通じて調査を行い、回答者には個別に対応している。相談件数は多い。いじめの事実が認められた場合、被害側および加害側の生徒に聞き取りを行い状況を把握する。加害側の生徒には生徒指導の内規に照らした適切な指導を行い、理解を深めたうえで日常の学校生活に復帰させている。
 - 支援部としては校内における相談スペース「ほっこりむらの」を開設。これまでに友人とのトラブルの相談などを受けた。内容によっては、臨床心理士への相談につなげることもある。
 - ・相談の仕方がわからず声を上げることのできない生徒の存在にも目を向けて頂くよう期待している。
 - ・教員から見て「困った生徒」と見えるのは、その生徒自身が「困っている」ということでもある。教員はその点を改めて認識して、学校現場における課題の早期発見・早期対応に努めてほしい。
 - ・①むらの卒業生に在宅勤務を行っている生徒はいるのか？ ②自ら発信することが難しい卒業生について課題の早期発見をどのように考えているか？（企業側担当者とはどのように連携しているか？）
 - ①について、1度目の緊急事態宣言のころに自宅待機者は存在したが、現状における把握はない。在校生への進路指導においては、在宅勤務を想定して進めている事例はない。②については、進路指導部のアフターフォロー担当者が対応している。また、在校生の新規実習に係る会社訪問時などに卒業生の情報収集を行っている。
 - ・就労に係るコロナの影響は大きい。『就・』における自身の担当の中で、この間に3名の離職者が出ている。緊急事態宣言が明けても職場の生活リズムが戻らず、勤務のシフトを変えてもらうなど対応を試みたが、実際の職場での緊張感に耐えられなかったケースがあった。他にも在宅勤務については、勤務スタイルの変化に伴う肥満（生活習慣病のリスク増加）や同居家族とのトラブルなどへの対応など、在宅故の新たな課題も生じている。
 - ・会社自体も変化している。在宅前提の雇用とそれに応じた職場環境の構築を進めているケースもある。
 - 就労に関して、以前のように「元氣よく挨拶ができる」ということが大きな価値をもつ時代ではない。
 - ・子ども達もタブレット端末による Youtube の活用などを通して、積極的に「講師」を選んで学ぶ環境を手に入れつつある。生徒が先生を選ぶ時代がそこまで来ている。世の中の変化に対する学校現場の教員の自覚はどうなっているのか？
 - 世の中の変化は大いに感じるどころ。しかし、学校現場で生徒と教員が直に関わる姿からは大きな変化を感じない。便利な機械が世の中にあふれても、人と人との関わりにおいて本質的な部分は変わらないと考える。

以上